

西洋の唐茄子

長谷川時雨

青空文庫

青葉の影を「柳の虫」の呼び声が、細く長く、いきな節に流れ
てゆく。

——まごたろ孫太郎むしや、あかがえる赤蛙……

ゆつくりとした足どりで、影を踏むように、汚れのない黒の脚き
やはん絆と草鞋わらじが動く——ち小さいな引出しつきの木箱を肩から小腋こわきに
かけて、薄藍色の手拭てぬぐいを吉原かむりにしている。新道にはまだ
片かげがあつて打水うちみずに地面がしっとりとしている。

——しもたやのくせに店をもっている家——そうではなかつ
たのかも知れない——閑散な店なのだったのかも知れないが、あ
んぽんたんはその家の、二間の障子がすぐはまっている店口みせぐちに

腰をかけて、まばらに通る往来ゆききの人を眺めていた。その家は一間
巾位はばの中庭があつたので、天窓ひきまどからのような光線が上から投げ
かけられ、そこに植うわつた植木だけが青々と光つていて、かえつて
店の中の方が薄つ暗かつた。天井から番傘がつるしてあるだけを
覚えている。眉毛まゆげをとつた中年増ちゅうどうしまの女房さんおかみと、その妹だとい
う女ひとと、妹の方の子らしい、青い瘦やせた小さな男の子とがいた。

学校の行きかえりにその家の前を通ると、白い障子を細目にあ
けて外のそを覗いているものがあつたが、声をかけられたのはその近
くだつた。はじめは何処どこのお子さんきこと訊いたりして、姉妹で私の
肩上げをつまんだり袂たもとの振りを揃えて見たりしていたが、段々に
馴染なじんで先方むこうでも大つぴらに表の障子を明け開ひろけて、店口に座つ

て私の帰りを待っていてくれるようになった。山吹きの枝のシンを巧く長くだしてくれて、根がけにしてくれたのもその人たちだつた。

ねずみ

鼠とり薬を売る「石見銀山」は日中か夕方に通つた。蝙蝠こうもりが

飛び出して、あっちこつちで長い竹ものほしざお棹たそがを持ちだして騒ぐ黄

昏れどきに、とぼとぼと、汚れた白木綿に鼠の描いてある長い旗

を担かついで、白い脚絆すげがさ、菅笠ひなかをかぶつてゆく老人の姿は妙に陰

気くさくいやだった。日中ひなかでも、

——いたずらものはいないかな……

という声をきくと、鼠でなくても、子供でも首をひっこめた。

この家の女姉妹は、なんとなく女子供がいじつて見たかつたと

見えて、私の髪を結ばせてくれといった。宅ではあんまりよろこばなかったが、彼女たちは私の短かい毛をひっぱって、練油ねりあぶらと色元結でくくりつけるのを悦んだよろこ——あたしは店さきに腰をかけて、足をブランブランさせたり、片っぽ飛ばした下駄を足さぐりしたりして、首だけ凝じつと据えている。

青葉がもめて、風がすつと通つてゆき、うすい埃ほこりがたつと、しんとした正午近くは、「稗ひえま蒔まき」が来る。苗売りが来る、金魚やがくる、風鈴やが来る。ほおずき売りが来る。汗ばんで来たなと思うころには、カタカタと音をさせて、定齋屋じよさいやがくる、甘酒売りがくる。虫売りがくる——定齋屋と甘酒やだけが真夏になればなるほど日中炎天をお練りでゆくが、その他は小かげをえらん

で荷をおろす。丁度その家の隣りが堀越角次郎という、唐物問^{とうぶつもん}屋^やの荷蔵の裏になって、ずっと高い蔵つづきの日かげなので、稗蒔屋はのどかになたまめ煙管^{キセル}をくわえ、風鈴屋はチロリン、チロリンと微風^{そよかぜ}に客をよばせている。そんな時あたしのおたばこぼんが出来上ると、中に赤や青や金色の小さな瓢箪^{ひょうたん}か、役者の写真の浮いている水玉のかんざしを、その姉妹が買つてさしてくれたり、腰にギヤマンの瓢箪をさげさせたりした。私のために大きな稗蒔きの鉢をかつて、柴橋^{しばばし}をかけさせたり、白鷺^{しらさぎ}をおかせたり釣師の人形を水ぎわにおくために金魚も入れたり、白帆船をうかせたりしてくれた。

けれどあんぽんたんには親しめない家だった。店口より上へ、

あがつた事がなかったの、いつの間にか私の妹の、人なつこいお丸ちゃん、代りに抱いたり、かかえられたりするようになった。

その家の右隣りの古板塀が、村上という漢方医者だった。その隣りが^{たきどこ}滝床——滝床といつても理髪店ではない。小さな酒屋だ。

店の向つて右手に、石で袖をした中に大きな水桶があつて、貧乏徳久利が洗つてあり、正面に^{もつき}盛切りの台が拭きこんであつて、真白な塩がパイスケに山盛りになつて、二ツ三ツの^{さかだる}酒樽と横に角^のの^{だる}樽が飾つてある店だ。

赤ら顔の頭の^は禿げた滝床は、大通りの大店をもっている廻り髪結さんだったのだ。だから酒屋さんの店にいるときはすけない。たまに店にいる時は、ずっと店の前の方へ

腰かけをもちだして、お客に白いきれをかけて斬髪ざんぱつをしている
 その道具が、菊五郎のおはこの『梅雨小袖昔八丈』の髪結新しん
 三さんざが持つてくるのとそっくりそのままのをつかつている。滝床親
 方は、ずんぐりした体にめくらじまのやや裾みじかな着附きつけでニ
 コニコ洋鋏はさみをつかつていたが、お得意なのは土鉢に植えた青い、
 赤い実のなっているトマトだった。

尤ももつとトマトなんて、知っているものもすけなければ、食べるこ
 となどはなおさらだったであろうが、細竹でささえて、二尺五寸
 ばかりに伸びたそれは、葉が茂って赤い実が美しく、斬髪の客の
 傍におかれてあつた。

「この実のなってるのなんだね？」

「西洋の唐茄子だということ——」

「へえ？ 珍らしいものだが、西洋の唐茄子って、ばかに細こまつかいもんだな。」

その一軒おいてとなりに紙屑屋かみくずやのおもんちゃんの家うちがあつた。おもんちゃんの家は表はせまくつて、紙屑で一ぱいだつたが——紙屑やといつても問屋だつたのだ——裏には空地があつて、糸瓜へちまの棚が田舎めかしかった。その後には空瓶の小屋があつた。空地では子供角力が夏になると催うされた。

おもんちゃんは疳かんの高い子だったので、みんなから狂きちがい氣あつかいにされて、ある日大門通りの四ツ角で、いたずら子供たちにとりまかれ、肌ぬぎになつて折れた鉄物かなものを振つて悪童を追いか

けていた。花井お梅の刃傷にんじょうの評判が高かったので「花井お梅、花井お梅」と、はやしたてられていた。

その隣家となりが小川湯、そうして三、四軒おいておあぐさんの家であつた。その向い側で面白い家をあげれば、角が土蔵から煙筒の出ている※芋屋の横腹、金物問屋金星かねぼしの庭口、仕立屋井阪さん、その隣りも大丸の仕立屋さん、猫ばあさんのいた露路口、井阪さんが丁字鬚ちよんまげで、ここの親方はヘツついという髪あたまの見本を見せておいてくれた鍛冶屋さん——表に大きな船板の水槽があつて、丸子や琉金りゅうきんの美事なのが沢山飼養されていた。鍛冶屋の店さきには、よくこうした水箱があつたがあれはなんのためだろうか、刀鍛冶などの流れの末とでもいうしるしなのかどうか。その隣り

が芝居や、講談などにある、芝日影町の古着屋で、嫁入着物に糊の附りづけものを売つたため、嫁御寮よめごりょうの変死から、その母親が怨みの呪のろい「め」と書いては焼火箸やけひばしをつきさしていたという、怪談ばなしの本家江島屋の、後家になつた娘のすんでいた格子戸づくり、それからどこかの荷蔵があつて、丁度滝床の向うが、吾平さんという馬具屋であつた。

吾平さんは顔の大きな、鼻も大きな、眼のちいさい人で、たつぷりした白髪をなでつけ、大きな鼈べつこう甲めがねぶちの眼鏡を鼻の上にのせて、紫に葵あおいを白くぬいた和鞍わぐらや、朱房しゅぶさの馬連ばれんや染革そめかわの手てつこ甲うなどをいじっていた。鞭むちとか、馬びしゃくとかいったものは一かたまりずつになつて沢山上から釣してあつた。漸ようやく一間半位

の間口だったが、賑やかな見あきない店で職人もせわしく働いていた。前を通ると二カワを煮る匂いがした。

村上という医者の家が一番変っていた。どんな時、誰がどんな病気でも、あんぽんたんが薬をもらってくる時、変だなあとおもうのは、練薬と膏薬こうやくの二種ふたいろだけだった。練薬は曲物まげものに入れ、膏薬は貝殻かいがらに入れて渡した。

敷石を二、三段上って古板塀の板戸を明け一足はいると、真四角な、かなりの広さの地所へ隅の方に焼け蔵がひととまえ一戸前あるだけで、観音開きの蔵前を二、三段上ると、網戸に白紙かみが張つてある。くぐりをあけてはいると、ハイカラに言えば二階はあるが一間の家で、入口の横に薬の名を書いた白紙を張りつけた、引出しの沢

山ある薬だんすがおいてあつた。薄暗い中に、紋附きの羽織を着た、斬髪ざんぱつの伸びた村上先生ごしんがいた。御新ごしんさんは庭で——空地で、粗末な土どべつどついで御飯ごはんを焚たいている。その近所に、シヨボシヨボと竹が生えているばかり、大きい方の娘さんは盥たらひで洗濯せんたくをしていた。入口の塀へいの近くに、さすが井戸だけはあつた。下の娘も黄色い顔で、外にもあんまり出なかつた。

このお医者さんは、外科はまるでだめだつたと見えて、女中の足の指も腐くさらせてしまったが、あんぽんたんの父の手の外傷きずも例の膏藥ごうやくで破傷風はしょうふうにしてしまった。がまん強い父が悪熱おんねつにふるえて、腕まで紫色に腫はれ上つてしまつても、彼は貝殻の膏藥ごうやくを貼はりちらした。木魚のおじいさんが吃驚びっくりして、医の方で自分の先生

のような木下さんという、旗本上りの顎髯あごひげの長いお爺さんを連れて来て手術をした。妙なところへ東洋風の豪傑と江戸っ子の負け惜しみをもつ父は、かなりな大手術であつたであらうに、わざわざ病室から離れまで出張して——枕も上らなかつたように思えたのに、八端はつたんのねんねこを引つけて、曲きよくろくによりかかり、高脚コップのお酒を飲みながら腕を裂かれていた。

木魚のおじいさんが助手で、膿盤のうばんは幾個もとりかえられた。

強い消毒薬のかぎは流れてきたが父の苦痛はすこしも洩れず、よく堪こたえている様子だつた。私はハラハラした。障子の硝子の隅ガラスから細く覗のぞいたが、父の姿は見えず、向うの欄間にかけてある、誰が描いた古画か、関羽かんうが碁盤を見つめている唐画が眼に來た。父

のこの大怪けが我もばからしい強がりから、爪でひつかかれたのだつた。それも猫でも子供でもなく、父の部下のような若い代言人たちだった。鷗洲館とかいう、蔵前代地の、お船蔵近くの大きな貸席で、代言人の大会があつた時、意見があわないうとて、父の立つ演壇へ大勢が飛上つて来て、真しんちゆう鍬の燭台で打ちかかるものや飛附いてくるものを、父は黒骨の扇——丁度他家からおくられた、熊谷直実くまがいなおぎねの軍扇を摸したのだという、銀地に七ツ星だか月だかがついていたものだ——をもつていて身をふせいだのを、撃げつけ剣けんの方の手がきいているので鉄扇てつせんをもっているのかと思ひ、死しにもの狂いで噛かみついたりひつかいたのであつた。

騒ぎのあつた翌日、その狼藉者ろうぜき一党が揃つて詫わびにきたが、

その時、父はすこし寒氣さむけがするといつていたが、左の手の甲が紫色に腫はれてるだけだった。対手あいての幾人かは頭に鉢巻したり、腕を結わえていたりした。そしていった。

「ばかな真似をしてしまつて、あれが刀だったら僕の頭は真二ツに割られているところだ。とても歩けはしないが、ぜひ詫わびにゆけと皆に抱えてこられた。眼が廻るほどピンピンする。」

「一度診察させるのだ、何しろ鉄扇だから、どこか裂けるか、折れるかしてると思う。」

「ばか言え、鉄扇なんて、そんなおだやかでないものを持つてゆくものか、弁論の自由を尊重しながら、そんな野蛮な——でも、じゃないよ、見ろ、この扇だ。」

みんな変な顔をしていた。元気な父は村上さんに膏藥を貼らせながら一人の手を見ていった。

「や、その爪か！ 汚ねえのだなあ。」

相手の人も、鷹たかの爪のようにのびて、しかも真黒な爪垢あかがたまっている自分の五つの爪を眺めた。他の者たちも呆あきれた。だが、当然驚かなければならない医者が平然としていた。

父はお玉ヶ池の千葉について剣を学び、初期の自由党に参加した血の気が、まだおさまらなかつたのであろう。友達たちも自然荒武者だった。その中に、親友であつて法律の先生である村田電造という人があつた。神田猿樂町さるがくちように住んでいた。黄八丈の着物に白ちりめんの帯をしめて、女の穿はく吾妻下駄あずまげたに似た畳附きの

下駄へ、白なめしの太い鼻緒のすがつたのを穿いていた。四角い顔の才さいづちあたま槌頭あたまだった。静かにお茶を飲んだり、御酒をのんだりしてはなしていた。

ある時、あんぽんたんが六才か七才だったろう、初夏に、このおじさんと父との真ン中に手をひかれて、鎧よろい橋ばしのたもとの吾妻亭という洋食やへいった。おさな心に残っているのは咬こう々たるらんぷと、杉の葉と、白い卓テーブルクロスだった。杉の葉は日本風の家を何か装飾したものであったろう、ブランデーをかけて火を燃すオムレツも珍らしかったが、私の眼に今も鮮かにくるのは赤いツブツブのある奇麗な小さな丸まあるいものだった。たしか一つぶしかついていなかったが、あたしが凝じっと眺めていると、父が気が

ついて、自分のお皿の中からとって、あたしの白いお皿の、青いものの上にのせてくれた。すると、村田さんもおなじように、近眼鏡を近よせて、転がさないようにナイフの上に乗せてよこした。それがあたしの、^{いちご}苺の**み**はじめだったのだ。食べはしなかったが、その赤さは充分に私を悦^{よろ}こばせ、最後までそのお皿をとりかえさせなかった。

「おかしな奴だ、気にいったら見ているばかりで、他のものも食わなくなっちゃった。」

父は帰ってからそういった。その癖がついて、洋食は大きくなるまで食べないで、手をつけないで、きらいではない習慣をもつた。

赤大根を知ったのもそれに似よっている。十ばかりの時、クリスチャンの伯母夫婦——台湾のおじさん——が、神田南校なんこうの原の向う邸やしきの中にいた時分、官員だったので洋室の食堂をもつていて、泊りにゆくと洋食が出た。従弟いとこと私の妹おまつちゃんと三人で、赤大根を見た時、お皿の上で、葉をつまんで独楽こまのように廻した。黒い立派な大きな門をもったこの邸の構内には、藤島さんという、伯父には長官にあたる造幣局のお役人のお宅があつた。竹柏園ちくはくえん ささきのぶつな 佐佐木信綱先生の夫人おくさまがそこのお嬢さんだった方だ。伯母の家の前、門のきわの竹の垣根に朝顔が咲いている家からはいい音がきこえていた、琴のこともあればヴィオリンの時もあつた。幸田さんという、女でも偉い方で、一生懸命に勉強してお出なさるの

だと、伯母はそのお家の前で鬼ごっこなんぞしていると叱つていった。あの有名な音楽家である幸田延子女史と、安藤幸子女史御姉妹のお若いころのことであつた。

南校なんこうの原はらとは、大学南校のあつた跡だと後に知つた。草ぼうぼうとして、ある宵よい、小川町の五十稲荷ごとおいなりというのへ連れてつてもらつた歸りに、原で人魂ひとたまというのを見た。

外国人の大きな曲馬団が来て、天幕を張り、夜になると太い薪まきを積みあげて炎をたてるのが、下町そだちの子供に、どんなにエキゾチックな興おもむき趣を教えこんだであろう。私は曲馬を見るよりは、その天幕ばり全部を見るのを楽しんだ。父が来て、伯母の家みんなと見物にゆこうとしても、私は外景を眺めているといつ

てみんなを困らせた。でも、原っぱのそこかしこに、馬が繋^{つな}いであつたり、ある場所には象がいたり、かしこい犬がいたり、人間にしても、美しい白人少女もいれば、黒んぼもいる。その人たちが惜げもなく腕や肩を出して、焚^{たき}火^びのかがりの廻りにいたり、朝、原っぱを歩いていたりする景色は、とても楽しい生きた画であつた。それにこの伯母の家にいると、牛^{うし}が淵^{ふち}へおたまじやくしを掬^{すく}いにゆけたり、駿^{するがだい}河台のニコライ会堂の建築場へもゆけるので、あきなかつた。御飯のときにみんなが十字をきるのも私の眼を丸くさせた。

青空文庫情報

底本：「旧聞日本橋」 岩波文庫、岩波書店

1983（昭和58）年8月16日第1刷発行

2000（平成12）年8月17日第6刷発行

底本の親本：「旧聞日本橋」 岡倉書房

1935（昭和10）年刊行

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

入力：門田裕志

校正：松永正敏

2003年7月4日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

西洋の唐茄子

長谷川時雨

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>